

崎村 弘文 (国語学・国文学)

琉球方言と九州方言の韻律論的研究

本論文は、実地調査に基づいて、琉球諸方言アクセントのほぼすべてが語声調方言であることを明らかにし、九州西南部から連続して分布するこの特異な方言アクセントについて詳細な調査研究を行ったものである。

日本語のアクセントには、現代東京アクセントのように、語の中に音の下降があるかどうか、あるとすればどの位置かが問題になるアクセントと、長崎や鹿児島のようにいくつかのタイプ（この場合は2つの型）があり、そのうちのどのタイプを選ぶかという種類を問うアクセントとがある。前者の東京のようなアクセントは、音節の数が増すと、アクセントの型の種類はそれに従って増加するが、後者の鹿児島アクセントのようなものは、音節数に関係なくアクセントのタイプの数は一定である。これは、中国語の、どの声調の語かという種類を問うアクセントによく似ているので語声調と呼ばれる。この二つのタイプのアクセントの違いは、長短いろいろな音節数の語のアクセントを調査して、音節数の増加にしたがってアクセントの型の種類が増加するか、あるいは音節数の増減に関係なく、常に一定数のタイプのアクセントの型が見られるかによって判断するしかない。そのためには、種々の音節数の語のアクセントを調査してみる必要があるが、これまでの調査では2音節名詞のアクセントを調べただけというものもあり、どちらとも判定しがたいということが実は少なくなかったのである。本論文は、島ごとに、あるいは集落ごとに異なるという複雑な方言をもつ琉球に直接足を運び、実地調査に基づいて、琉球方言アクセントは、基本的に語声調方言であることを確認したものである。

本論文は、大きく琉球方言編、九州方言編の2編からなり、全体のはじめに総論編、末尾に総合編を置いた構成になっている。

琉球方言編では、琉球方言の三分派（西部分派・東部分派・中央分派）について、それぞれいくつかの調査地点を設定し、2拍語だけでなく、4拍・5拍の多拍語についても調査を行っている。西部分派では、与那国祖納・八重山竹富・宮古多良間方言、東部分派では、徳之島・沖永良部・与論島・喜界島・奄美大島諸方言、中央分派では、沖縄国頭・今帰仁・久高島・渡名喜島方言など広範囲に調査を行い、いずれも基本的に2型ないし3型の語声調であると結論付けている。

九州方言編は、2型の語声調が行われている長崎・熊本・鹿児島などの九州西南部アクセントを中心に調査考察を加えたものである。これまであまり検討を加えられることのなかった漢語、外来語についても調査し、A型・B型の二つの型との関係を見てみると、南部の鹿児島と佐賀・長崎などの北部2型アクセントとでは対応に違いがあることなどが新たに明らかになったとしている。また、助詞・助動詞のアクセントをはじめ、これまで比較的手薄であった研究課題にも広範に意欲的な研究を加えている。

以上、本論文は、琉球方言のアクセントについて直接現地調査を行い、琉球方言がほぼすべて語声調方言であることを明らかにし、九州西南部から連続的に分布する特異な語声調方言帯を形成していることを指摘するとともに、その内部事実についても数々の新知見を加えている。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。